

校歌

完戸 一郎 作曲
工藤 八郎 作詞

一 昔をしのぶ 水郷に

ひばりさえずる 朝ぼらけ

最上の流れ たたえつつ

楽しく学び 身をきたえ

規律正しい 友つどう

ああ輝ける 寺津校

二 見わたす限り はるばると

黄金波うつ タまぐれ

月山の峰 のぞみつつ

楽しく遊び 働いて

すくすく育つ 友つどう

ああなつかしの 寺津校

校章(おもだか)の由来

昔から、この辺りの池、水田、湿地などに生えている「おもだか」の葉と花を組み合わせたものである。三枚の葉は、元寺津・舟町・新田、すなわち寺津地区の全部を表している。上の右と左に出ている、ふさの形をした花は、寺津小の子どもの仲のよい、きれいな形を示し、下にある花の茎は、小学校の「小」を形どったものである。



寺津の地名の由来

南北朝時代1356年、足利氏の子孫、斯波兼頼が出羽按察使に任せられて山形に入り、城を築き、神社や寺を建て、山形市の基礎を築いた。斯波氏は土地の名をとって最上氏と称するようになった。斯波氏はその地理を調べようとして家臣を派遣し視察させたが、民が武士を恐れて近寄らず調査が思い通りに進まなかったため「不入掌(手に入らず)の郷」と呼ばれ、その訛に当て字を使ったものが地名の起こりだと言われている。

また、一説には、村名を寺津と書くようになったのは約600年程昔のことで、領主は山形城の斯波兼頼の家臣、藤原秀敏で近江国の生まれであった。秀敏は城を築き、神社や寺を建て、村を整え、交通を便利にした寺津中興の主だと申すべき人であったという。この期の村の大改新にあたり、村名も新しくしたいということになった。寺の字義に「もと政事を司る役所」とあり、後に「仏寺」になったことから「津」はさんずいへんに聿(ふで)であり、文章を司る潤いのある港(あるいは岸)という字義がある。

これらを総合して考えると、寺津という文字には「宗教をもって民心を統一し、文化的役所を設ける豊かな港」という意味もあると言われる。